会議議事録

事業名	平成２６年度「職業実践専門課程」の推進を担う教員養成モデルの開発・実証
代表校	一般社団法人　全国専門学校教育研究会

会議名	第４回　アクティブラーニング分科会
開催日時	平成２６年１２月１日（月） １４：００～１６：００（２ｈ）
場所	グランドヒル市ヶ谷　２階「琵琶」
出席者	①委員 ・小林昭文、三谷徹男、信岡誠三、芦澤昌彦、長谷川綾子 岡村慎一、伊藤慎二郎、鈴木建夫、 上原道子（計９名） ②オブザーバー 永井真介、飯塚正成（計２名） ③事務局 ・花田香央理、下島耕一（計２名） （参加者合計１３名） 議　事 １）開会 ２）研究事業検討 ■第３回ＡＬ分科会（前回分科会）議事の確認 ■成果物の内容について ３）閉会

議題	伊藤先生より 配布資料の説明と１２月２０・２１日の実証講座の紹介 　開催場所と現在の応募状況 　質問に小林先生が答える形 芦澤先生より 講座終了後、学校に戻って他の教員を巻き込んで、組織改革、改善が出来るコツみたいなものを習得できるのか？ 小林先生より 最低限のスキルだと思う。今回ＡＬセッションを経験することで、「質問によって人を動かすことが出来る」ことの感覚はわかってもらう。現場でそういう授業をやっていくことで、コツがわかっていきスキルアップする。学生が２０歳で学んだスキルでは６０、７０歳までは生きていけない。常に成長し続けるスキルを持った人材になる。社会人として生きていけるスキルを育てる。組織改革が出来るリーダーシップを育成していく必要がある。リーダーシップの定義は、役職や権限、または天才的な才能を持った人がリーダーシップを取るというのではなく、誰でもトレーニングを積めばそのスキルを身につけられる。授業を通して、リーダーシップスキルトレーニングをやって頂けば、社会人として生き抜く力、新しいスキルを学習して成長していく力は継続できる。 伊藤先生　　参加する先生方はＡＬ型授業の理論を深く理解しないといけない？ 小林先生　　能動的授業とは、聞くだけでなく、話す、聞く発表する動作を含む学習形態。アクティブ型授業とは、授業時間の中の一部にでも、能動的な活動を計画的に取り入れてあればいい。 岡村先生　　実証講座の目標は単年度なのか、次年度も継続するか。評価のポイント、教員をテーマにしたセッション仕掛けがあるか。教師たちが成長した部分を評価できるか。 小林先生　　今後も成長し続ける学生を育成するため、先生も仕事をしながら成長し続けていただく。スキルも上がっていく。 今回のＡＬセッションのテーマは自分の仕事に関することに限定。色々な学び、気づきが起きる仕掛けがある。

	Kolbの経験学習理論が一番大事。実証講座の中で「体験」「振り返り」「気づく」「再計画」というサイクルを何回も回していく。授業をした後で自問自答が出来るようなればいい。 伊藤先生　　講座終了後にアンケートをすれば、自分も出来るようになったとか、自分を計るものさしが出来ていい。 事前学習　　計画より短縮形で。東大のｅラーニングと文献検索と受講生あての質問事項を用意。事前の文献調査に役立てる報告書が産能大にあるので利用する。 実証講座　　殆どの教師がＡＬ型授業の未経験者なので、それの体験と解説が中心になる。教師の進歩がないのは、他人の授業は見ないし、たまに授業研究があっても、批判とつるし上げだけ。ＡＩセッションでは、質問を受けることで、授業を振り返り、気づき、再計画を行うKolbの経験学習理論を実践することになる。今回の実証講座の振り返りの会についての説明。「批判とつるし上げ」ではなく、質問に答える形で振り返り、気づくという形になる。リーダーシップのスキルに重要なのは、「質問」考え、振り返り、気づきを促す質問のテクニックを身のつけることで、気持ちよく人を巻き込む、これが新しいリーダーシップの定義。二日目のアクションラーニングセッションの仕方。ＡＬコーチの役割等の説明。問題提示は全員が行い、質問し、考え答えて気づく、ということを一日行う。 芦澤先生　　「介入」という言葉が重要。初日に介入の理論、二日目に実地という考え。理論と実地という考え方なら、受講生も理解しやすい。 小林先生　　理論を完璧に理解するのは難しいし無駄。教師は実施者、大事なことは、おおまかな理解と実際に使うスキルのマスター。今後ＡＬ型授業経験者が入学してくる。従来型の授業ではなく、ＡＬ型授業の実践が必要。ＡＬコーチまで出来るスキルが必要。 小林先生から成果物に関することと、著作権に関する質問。 結果的に、成果物は、全専研に権利がある。（永井先生） 講義系の先生は、ＡＬ型授業は演習系には向くが講義系には向かないと思っている。実際は講義系でも資格取得の授業でもすべてＡＩ型授業は適応する。ＡＬ型授業では、成績の良い子が教える方に回り、不満が出る。そこで、成績上位者でも手こずる課題を出すのが良い。

	事後アンケートの意義について。また受講者が習った手法を自分の担当科目に適用できたか検証できる成果物を作成させる。 永井先生　　事後に関しては、今年度は行わない、次年度に回す。実証講座の最後に何らかの成果物があがれば評価できる。 小林先生　　成功事例として、麻生、ＹＩＣの話 三谷委員　　スイスのビジネススクールでの「企業内学習」という概念について。 永井先生　　職業実践専門課程と企業との連携に関連して企業の意見を取り入れていく。事業の継続性を考え、今年受講した教師が各校で水平展開し、今後どうするか、システム作りや企業との関連の仕方等を発展させていく。つまり、今年受講した人が次年度も受講するのが良い。 ＡＬ分科会の成果物 １、実証講座のカリキュラムやシラバスの開発 ２、実証講座の教材の開発 ３、実証講座のマニュアルの開発 の３点 今後のスケジュールの説明

以上